

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：22304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23593242

研究課題名(和文) 温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者の回復を促進する看護の質評価指標の開発

研究課題名(英文) Development of an index of the quality of nursing for promoting the recovery of patients with breast cancer receiving radiotherapy following breast-conserving surgery

研究代表者

小林 万里子 (KOBAYASHI, Mariko)

群馬県立県民健康科学大学・看護学部・講師

研究者番号：20433162

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者の体験とその看護実践を明らかにし、2側面を合わせた要素を反映する、系統的、現実的な温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者の看護の質を保証する評価指標の作成を試みた。統計処理および再構成した看護ケア80項目を評価項目に挙げた。また、患者特性として抽出されたカテゴリに対応する看護ケア26項目を評価項目として考案した。評価項目106項目のうち、評価内容の重複または同じ意味内容は言い回しを検討して1つとし、全102項目を指標試案とした。乳がん・放射線治療の専門家に対して、看護の質を表す内容か、わかりやすいかなど、項目の精練と検証を行った。

研究成果の概要(英文)：The present study elucidated the experiences of patients with breast cancer receiving radiotherapy after breast-conserving surgery as well as the nursing practice, and created a systematic, practical index that reflects elements that combine these two aspects, entitled "Assessment index for ensuring the quality of nursing". A total of 80 items of nursing practice characteristics that were statistically processed and restructured were used as assessment items. In addition, 26 items of nursing care corresponding to categories identified as patient characteristics were created as assessment items. Among these 106 items, those that overlapped in the content or had the same semantic content were merged into a single item based on consideration of the expression, and a total of 102 items were included in the proposed index. The items are being refined and verified with specialists in breast cancer and radiotherapy in regard to aspects such as whether the contents reflect nursing quality.

研究分野：医師薬学

キーワード：乳房温存術 放射線治療 回復 看護の質 評価指標

1. 研究開始当初の背景

乳房温存術後の放射線治療は外来通院で行われることが多く、看護師が患者の心身の不調や生活上の困り事に対して、タイムリーに支援することは困難な現状にある。放射線治療を受けながら心身状況や生活をうまく調整することは、患者自身のセルフケアに任されていると言っても過言ではない。また、十分な医療従事者配置がされていない施設もあるなど、放射線治療を受ける患者を取り巻く治療環境は地域格差も大きい。

このような状況の中、がん医療の均てん化を目指し、「がん対策基本法」が施行され、看護師はがん医療に関わる専門職者として、これまで以上に患者支援の質向上を推進することが求められるようになった。また、「放射線療法推進とこれを専門的に行う医師や医療従事者の育成」が重点課題として取り上げられ、平成 21 年度から、がん放射線療法看護認定看護師教育課程が開講し、放射線療法に関する看護の確立が強化されることとなり、放射線治療における看護の質を保証することは重要な課題となっている。

2. 研究の目的

本研究は、温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者への看護師の看護実践の実状と課題(看護実践特性)を明確にすること、温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者の特性を把握することの 2 側面を統合して、温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者の回復を促進し、看護の質を保証する評価指標の開発を目的とする。開発にあたって、がん患者の回復とは、「新たなコントロール感覚を構築し、自分らしさを取り戻すプロセスである」ことを前提とする。また、ドナベディアン[®]の質評価の枠組みを参考とし、温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者が置かれる療養の状況に沿う評価指標の開発を目指す。

3. 研究の方法

(1) 温存術後放射線治療期の看護を体系化するため、温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者に関わる看護師の看護実践の実状や課題を明らかにした。

対象は、日本看護協会乳がん看護認定看護師名簿に名前、もしくは勤務先を公表し、研究者が直接、調査協力依頼と質問紙票を送付できる乳がん看護認定看護師(以後、CN)97 名、および日本放射線腫瘍学会認定放射線治療施設一覧に掲載されている施設で、温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者と関わると考えられる 225 施設に勤務する看護師(以後、NS)を対象とした。

研究倫理審査で承認を得た手続きを経てデータ収集を行った。データ収集方法は、質問紙郵送法で行い、質問紙の内容は、対象概要、温存術後放射線治療前・中・後の看護ケア実践内容、必要と思っているが実践できて

いないケア内容、ケアが実践できない理由などについて 113 項目を設定し、4 段階の選択法および自由記述で回答を得た。

記述統計により、ケア内容の実施割合等の傾向を示した。また、CN と NS の回答の差を Mann-Whitney の U 検定で分析した。有意水準は $P < 0.05$ とした。

(2) 温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者に対する面接調査から、この時期の患者体験を通して患者特性を明らかにした。

対象は、A および B 病院において乳房温存術後に外来通院で放射線治療を受け、終了後 6 ヶ月以内の患者 15 名とした。

データ収集は、放射線治療期の心身状況、生活上の困難や対処など患者の体験について、半構造的面接を 1 ~ 2 回行った。

データを逐語録に起こし、内容分析の手法を参考にして、放射線治療前・中・後の体験に分けて質的帰納的に分析した。

(3) 温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者に対する質問紙調査から、身体的、心理社会的な患者特性を明らかにした。

対象は、A および B 病院において乳房温存術後、外来通院で放射線治療を受ける予定の患者 30 名とした。

データ収集は、放射線治療開始時、治療中、治療終了時の時点で行った。質問紙郵送法で QOL-RTI (放射線治療における QOL 尺度、以後 QOL)、POMS 短縮版(気分・感情尺度、以後 POMS)、自己効力感尺度(以後、GSES)を用いて調査した。有害反応(全身的・局所的)の出現時期、程度は、有害事象共通用語規準 VER3.0 でカルテ上から評価した。

分析は、記述統計値の算出、統計学的検定を実施した。

(4) (1) ~ (3)の乳房温存術後放射線治療の看護実践特性と患者の特性調査から、2 側面を合わせた要素を反映する看護の質を保証し評価する指標の作成を試み、質評価指標の精練・検証を行った。

4. 研究成果

(1) 第 1 の研究では、CN40 名、NS102 名の有効回答があった。CN において、放射線治療前では項目に挙げたケア内容の約半数で実施割合が 70% を超え、放射線治療中では約 30 ~ 50% 未満、放射線治療後では 40 ~ 60% の実施割合であった。放射線治療前は概ね必要な看護ケアは実施できているが、治療中・後では必要な看護ケアが実施できていない状況であった。また、CN と NS の看護実践の比較では、放射線治療前 15 項目 (55.6%)、治療中 18 項目 (100%)、治療後 9 項目 (45.0%) で有意差がみられ、看護ケア実施割合は、NSの方が CN より高かった。これらより、乳房温存術後に放射線治療を受ける患者に関わる看護師が、担当する場で役割を確実に果た

していくことが重要であること、必要に応じた専門性を有する看護師と協働や連携を強めることで必要な看護ケア実施割合を押し上げ、看護の充実につながる事が明らかになった。

(2) 面接調査から得られた患者体験は、以下のようなカテゴリに分類された。放射線治療前では【放射線治療移行への覚悟を決める】、【放射線治療移行への戸惑いがある】、【放射線治療が及ぼす影響に不安がある】、【相談する快適な環境がない】など、放射線治療中では【放射線治療に伴う局所症状が出現する】、【放射線治療に伴う負担感がある】、【相談する快適な環境がない】、【順調な経過であるという実感が無い】など、放射線治療後では【乳がん治療による局所症状が残存する】、【乳がん治療の影響で日常生活に制約がある】、【今後に対する不安がある】などであった。看護支援として、放射線治療にスムーズに移行し、継続できるように有害事象や治療に関する情報提供や相談できる環境づくりが必要であること、放射線治療後も残存する症状や制約のある生活に対してコーピング強化・セルフケア向上に努める必要があることが示唆された。

(3) 縦断的質問紙調査は、データ収集を30名と予定したが、途中脱落や記載不十分により有効回答は29名となった。QOL、POMS、GSES得点の推移は、中間で低下傾向はあるものの、それぞれ経時的な有意差は認められず、比較的良好であった。しかし、QOLでは、構成項目を詳細にみていくと「お金の心配」、「明るい気分」、「周囲の支え」などの心理社会的な5項目の経時的変化に有意差がみられた。各得点への影響要因としては、QOLでは術前化学療法、術後化学療法、照射時内分泌療法併用、POMSではQOLの影響要因の他に倦怠感が挙げられ、GSESでは年齢、術後化学療法で有意差を示した。他に、尺度間の相関として、QOLとPOMSでは3時点で負の相関があった($r = -0.639 \sim -0.872, p=0.008 \sim 0.000$)。QOLとGSESでは、放射線治療開始時($r=0.522, p=0.038$)、治療終了時($r=0.684, p=0.003$)で正の相関が認められ、POMSとGSESでは開始時($r = -0.647, p=0.007$)、終了時($r = -0.658, p=0.006$)で負の相関が示された。これらのことは、患者のQOLには補助療法の有無や心理社会的な要因が影響し、気分・感情状態の安定や自己効力感の高まりはQOL向上に関与することを示している。看護の視点として、「年齢や症状、治療経過、治療局面と生活の調整、環境といった患者状況を把握した働きかけをする」、「若年層の心理社会的な側面の充実を図る」などの看護の視点が示唆された。これらはQOL向上に貢献し、看護の質を向上させる指標となる。

(4) これまでの研究の成果である温存術後

の放射線治療にある患者への看護実践特性と患者特性の2側面を反映しているのかを焦点として、温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者の看護の質評価指標の評価内容と項目を考案した。

乳がん看護に関わる看護師142名の実践調査で用いた「必要と考えられる看護ケア」65項目の質問は、最新5年の文献や書物で乳がん患者が抱える問題状況、放射線治療を受けるがん患者の看護を抽出した。加えて、乳がん看護認定看護師や乳房温存療法の一環としての放射線治療に関わっている診療放射線技師への聞き取りを参考に、温存術後放射線治療期において必要な看護ケアを網羅できるように作成したものである。質問項目は評価項目と考えられ、この回答から天井・フロア効果に該当する項目を削除し、評価項目となる38項目を選定した。また、「実践できていないケア内容」、「ケアが実践できない理由」の質問項目および「看護ケアの課題」から42項目の評価項目を構成した。面接調査から得られた患者体験のカテゴリや看護の視点などについては、「放射線治療開始後に患者と話す機会を持つ」、「終了前に治療終了後の不安を聞く機会を持つ」、「治療中は肯定的な声掛けをする」など、その内容が示す具体的な評価項目となる文言を考案し26項目を追加した。合わせて、全106項目のうち、評価項目の内容が重複または意味内容が類似する項目は言い回しを検討して1つとし、全102項目が評価指標項目試案とした。ドナベディアン¹⁾の質評価の枠組みを参考にするとしたが、2側面の統合において3つの調査研究成果を合わせて構造、過程、結果指標を構成するのに難渋した。研究成果として、「どのような看護ケアが患者にとって良い結果をもたらすのか」に焦点があるため、看護ケア過程指標の開発を優先した。

乳がん・放射線治療の専門家である研究者や実践家とともに、評価項目は実践状況、実状にそぐわない、あたりまえ、ここまでできないなど現実性を踏まえ、温存術後放射線治療期にある乳がん患者の看護の質を表す内容か、わかりやすい言い回しかなど意見聴取を行っており、項目の精練、妥当性の検証を進めている。また、因子分析により温存術後放射線治療期の看護の質を構成する要素を明らかにしていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

小林 万里子、高平 裕美他2名、二渡 玉江(5番目)、乳房温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者に対する看護ケアの特性 -乳がん看護認定看護師と乳がん患者に関わる看護師の看護実践の比較-、Kitakanto Med J、査読有、62巻2号、2012、129-137
リポジトリ

<http://hdl.handle.net/10087/6886>

小林 万里子他4名、中西 陽子(5番目)、
二渡 玉江(7番目)、乳房温存術後に放射
線治療を受ける乳がん患者の看護に関す
る調査 - 乳がん看護認定看護師の看護ケ
アの実状と課題 - Kitakanto Med J、査読
有、61巻3号、2011、349-359
リポジトリ

<http://hdl.handle.net/10087/6195>

[学会発表](計6件)

小林 万里子、乳房温存術後に放射線治療
を受ける乳がん患者の自己効力感の特性
- 自己効力感の関連要因およびQOLとの関
係 - 、第45回日本看護学会学術集会慢性
期看護、2014年9月12日、「アスティとく
しま(徳島県徳島市)」

小林 万里子、乳房温存術後に放射線治療
を受ける乳がん患者の感情特性、第28回
日本がん看護学会学術集会、2014年2月8
日、「朱鷺メッセ(新潟県新潟市)」

小林 万里子、温存術後に放射線治療を受
ける乳がん患者の心身状況の変化 - 照
射開始時から照射終了1ヶ月後までのQOL
調査 - 、第27回日本がん看護学会学術集
会、2013年2月16日、「石川県立音楽堂他
(石川県・金沢市)」

小林 万里子、乳房温存療法で放射線治療
を受ける乳がん患者の療養過程の苦痛、第
17回国際がん看護学会、2012年9月10日、
「プラハ(チェコ)」

二渡 玉江、乳房温存術後に放射線治療を
受ける乳がん患者の看護ケアの課題、第17
回国際がん看護学会、2012年9月10日、
「プラハ(チェコ)」

小林 万里子、温存術後に放射線治療を受
ける乳がん患者への看護実践に関する調
査 - 乳がん看護認定看護師質問紙調査
の自由記述の分析 - 、第26回日本がん
看護学会学術集会、2012年2月12日、「く
びきメッセ(島根県・松江市)」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 万里子(KOBAYASHI, Mariko)
群馬県立県民健康科学大学・看護学部看護
学科・講師
研究者番号: 20433162

(2) 研究分担者

二渡 玉江(FUTAWAYARI, Tamae)
群馬大学・大学院保健学研究科・教授
研究者番号: 00143206

中西 陽子(NAKANISHI, Yoko)
群馬県立県民健康科学大学・看護学部看護
学科・教授
研究者番号50258886